

あの日の頃 - 17

矢崎則子

新任の頃、私が最初に経験した合宿は五年生の尾瀬高原学校でした。その年の尾瀬は雪が深く、尾瀬登山はできませんでした。その代わり尾瀬ヶ原よりは手前の津奈木沢湿原へいきました。湿原には水芭蕉が美しく咲き、子供たちも雪の中に流れる小川のせせらぎ、小鳥の声など自然の美しさに感動していました。そんな合宿の夕方、ホテルに帰ってからのことです。保健室の先生から、喘息の子供が苦しんでいる為、もう一人、先生に来てほしいと連絡が入りました。保健室には、喘息の子供が横たわり呼吸器を使っていました。保健担当の先生が担任の先生へ連絡を取りに行った間も戸供は涙を流して苦しむばかりでした。呼吸器を使っても「苦しい、苦しい」と泣きながら訴え始めました。喘息の発作を目にするのは私にとって初めての事でした。この子が呼吸できなくなったら.....そう思うと、先生になって二ヶ月程だった私は、その子とただ共に居ることしかできませんでした。幸い、この子供の発作はその後、収まりましたが、先生というものは子供の命をも預かっているという責任の重さを、この時、身をもって実感したのです。

英語劇の製作、発表も忘れられない思い出のひとつです。その時の劇の内容により多少の違いはありましたが、合唱、合奏、ダンスなどを含む大きなものをめざしました。脚本作成は前年度の春休み頃から始め、一学期から練習を行いました。男子クラス、女子クラスとクラスが分かれているので、場面作りのため、朝礼前、休み時間、放課後と、授業以外の時間にも練習を積み重ねました。これらの練習は合同教室や屋上を使って行いました。照明や効果音、幕などの仕事も子供たちの手で進めていけるようにしていきました。夏休みには先生方の御協力をいただき、大道具、小道具の作製を進めました。動くカボチャの馬車や、お菓戸の家、開く大岩など、たいへん手が込んだ物を作っていました。また、おかあ様方の御協力もいただき、その劇に合った衣装なども準備していただきました。二学期には行ってからは、体育館で学年合同練習を行い、仕上げへと向かいました。大音楽会当日、衣装を着た子供たち、楽器を持った子供たちが、真っ暗な舞台裏や舞台わきに静まり返り開演を待ちました。やがて劇の発表が終わり戸供たちは大きな拍手に包まれて舞台から降りて行きました。先生たちと子供たち、そして子供たち同士の大きな協力があったのはじめて、できるものでした。練習を通して通常の教室での授業とは、また違った形で子供たちと交流できたことが、劇を作っていく上で、私の大きな励みとなりました。

P.A.M.で老人ホームを訪問した時のことです。歌、ゲーム、クイズ、寸劇、紙芝居など催し物を準備しての訪問です。子供たちは老人ホームの方々に喜んでいただけるように、一所懸命、催し物を行いました。老人ホームの方々の中には涙を流して喜んでくださった方もいらっしゃいました。この日だけはと、お体が不自由なのに、杖をついてホールへ集まってくださった方もいらっしゃいま

した。子供たちが手作りのカードと花束をおじい様、おばあ様へプレゼントすると、おじい様、おばあ様方からも、やはり手作りの壁掛けなどのおみやげをいただきました。催し物を通してホームの方々と子供たちの心が、いつの間にか通い合っていました。老人ホームでの楽しかった一時間が過ぎ、ホームを後にする時、大勢のおじい様、おばあ様が車椅子に乗ってまでも玄関先までお見送りにいらしてくださいました。帰りのバスの中では子供たちも「来て良かった。」と目を輝かせて言っていました。戸供たちの純粋な心に接する時、先生になって良かったと、いつも思います。

私は今、この原稿を夏休みに書いています。校庭にはジャングル・ジムも鉄棒も砂場も、もうありません。この会報がみなさんに届く頃には仮校舎での学校生活も波に乗っていることでしょう。みなさんの学び舎であった旧校舎はもうすぐ取り壊されます。けれども、校舎が新しく変わっても、みなさんのあの六年間という時間は、ずっと、ここに生きていくと思います。もちろん聖ドンボスコの教育に根ざした暖かな校風も決して変わることはありません。

そして私も教師としての研鑽を積みながら、卒業生のみなさんが元気な姿を見せてくれるのを楽しみにしています。

【同窓会報、第 17 号 - 平成 10 年 4 月 1 日 - から転載】